

## カルヴ、マウルブロン

### —文学とふるさと—

藤井啓行

ヘルマン・ヘッセの文学についても、はっきりとした否定的な見方がある。近頃読んだものの中では、たとえば Karlheinz Deschner という1924年生まれの文芸評論家が、》Eine literarische Streitschrift《としての》Kitsch, Konvention und Kunst《(1957)の中で、その否定の立場を明らかにしている。

この本の扉に、彼はゲーテの》Man kann in Deutschland oft bemerken, daß derjenige, der einen sogenannten Lieblingsschriftsteller der Nation strenge tadelt, immer wegen eines bösen Herzens in Argwohn steht.《という言葉を引用したが、ドイツ国民の愛読する作家をあえて酷評するという意図をもって、ヘッセにも本文の中で相当数の頁をさいているのである。彼の所説にしたがえば、世には、その最もすぐれた作品が明らかに天才を示しているような第一級の作家たちがいる。過去数十年間の叙事文学においては、その中に、とりわけ Robert Musil, Hermann Broch, Hans Henny Jahn の名前があげられるであろう。次に、第一級ではないけれどもとにかくディヒターで、その書物がなお芸術であるような作家たちがいる。この中に例えばヘッセなども含まれる。もっとも、その作品の中で僅かがこの名に価するだけであるが。次には更に、上と同様やはりディヒターであるけれども、単に亜流としての意味においてそうであるにすぎない作家たち、その作品は芸術ではあっても、例えばガイベルの或る詩がゲーテの或る詩を前にして芸術だといっているのと同様の意味において、そうであるような作家たちがいる。これには、ふたたびヘッセの名が、一連の書物ならびにそのすべての抒情詩の製作者として、そして更には Carossa, Wiechert, Bergengruen の名が、すなわち、単に伝統的な手段によって作品を形成する大部分の作家たちの名前があげられるであろう。(Ernst Jünger

をも、デシュナーは認めない。) この際彼の批判の対象になっているのは、作品の主題ではなく、あくまでも表現・叙述である。ある芸術作品の価値・無価値を決定するのは、何が表現されているかではなくて、それが如何に表現されているかということである。したがって或る作家をして真の意味においてディヒターであらしめる決定的なものは、すなわち言葉である。このような観点からデシュナーは、抒情詩をはじめとするヘッセの作品の多くを、とりわけ小説「ナルチスとゴルトムント」を Kitsch だと断じたのである。

いま私は、それについて多くの枚数を費やすゆとりはない。ただこの批評家の基本的な立場はきわめて明快で、論断の刀捌きは小気味よいほどである。ヘッセにたいする否定的な解釈においても、その引用個所の限りにあっては、一般読者の同感を誘うところが必ずしも少なくなさそうである。往々にして認められる構成や性格描写の甘さは、すでにヘッセ自身が自覚しているところで、私も異議を述べようとは思わぬが、彼の文体をもって、ただ主としてドイツ浪漫派の亜流だとする見解には、容易に首肯しがたいものがある。特定の基準を適用して、その文体を単なる甘美なマンネリズムと断定するのは、むしろたやすいことであろう。だが鋭い論難の矛先にいたずらに惑わされず、心をひそめてその作品の音楽に耳を澄ますとき、異邦人の私にも、上の亜流 (epigonal) という表現がいつか空しい響きをたてるにいたる。心惹かれる作家は、もとより必ずしも所謂大作家である必要などない。けれども仮に少なからぬ欠点・弱点があろうとも、その本質の肝腎かなめのところにおいて、読む者を強くとらえる創造性をそなえたものでなければならぬ。普段はむしろ接しないときが多くても、何かことある折には帰着いてそこから変らぬ慰めを得るような、いわば心のふるさととも言える存在であるべきではなからうか。自分にとってヘッセという作家は、長年そのような対象であった。デシュナーが同じく認めない作家であるが、R. Binding の《Moselfahrt aus Liebeskummer》なども、私にはそういった懐しい作品の一つである。

ヘッセにとって、ゲーテやニーチェのような存在はいかにも偉大な模範そのもので、「ファウスト」や「ツェラトゥストラー」などは、仰ぎ見る巨峯と言えるのであろう。だがヘッセの作品のすぐれたものの中に音楽を

読み、そこに、例えばフリードリヒ・ヘルダーレーンの「ヒュペーリオン」の流動的な文体、その絶妙なリズムとメロディーの或る新しいヴァリエーションを求めたりするのは、果して思い付きにすぎないだろうか。

「ヒュペーリオン」といえば思い出す。私がまだドイツ語を習いはじめたばかりの頃、英語や少々齧っていたフランス語などにもまして、この言葉の美しさをはじめて知らされたのは、藤森秀夫氏編註になる、ドイツ文字で印刷されたハイネの抒情詩集によってであった。（藤森先生とはその後しばらく或る大学で一緒だった時期があるが、飄々として孤独なお姿は、このハイネ詩集と重なって、今も忘れがたいものがある。）それらの詩の平易でしかも音楽的にみごとな律動に、私はドイツ語を学ぶ意慾をはじめて本当に持つことができるようになった。

中学の頃から言葉の持つ魔力に惹きつけられていた私は、終戦まぎわに在学していた或る海軍の学校の剛健な世界にあって、そこにいくつも入りこんだ外国語（英語）のハイカラな感触を、心ひそかに強く愛していたものである。たとえば、そこでの生活において態度や心組みでとりわけ望まれたのは、スマートネスということであり、訓育の「華」は Каттер、同期生はすべてクラスメート、日常強調された精神がシーマンシップ、等々。またその後、ソーロウの「ウォールデン」の、自然にたいする綿密な優れた観察と熱烈な讃美に親しく接するに及んで、英文学の世界に引き入れられるのを覚えた。さらに当時私は、お定まりのごとくボードレー、ヴェルレーヌ、ランボーなどの詩人に翻訳によってはげしく魅惑され、また特にフランス印象派の絵画に魂を吸い寄せられて、フランス語を習いはじめていたが、この言葉のまろやかな味わいをひそかに楽しんでいたのである。そうした中にあって、ともあれハイネは私にドイツ語、ドイツ文学への門を最初に開いてくれたものということができる。

こうして得た素朴な感動というのは理窟をこえたもので、その後数多くの優れた近代詩・現代詩にも追々触れることとなったが、ドイツの詩で、この初めにうけたハイネのドイツ語の鮮烈な印象を凌駕する力を持つものにはなかった、と言ってよいように思う。そしてこれに続いて胸底を揺ぶったのが、他ならぬ「ヒュペーリオン」の音楽なのであった。母国語の古典として愛誦する万葉集や平家物語などとならんで、ハイネと後にヘルダー

リーンこそ、ドイツ語の領域にあってあの頃の私を導いた二つの星である。

それは別として、ヘッセの世界には何よりもまずアイヒェンドルフが息づいている。ドイツ浪漫主義の伝統の、二十世紀における栄光がある。浪漫主義は、ドイツの文化、ドイツの精神とその本質において切り離すことのできぬものだが、その現代における新しい開花が、よい意味でもわるい意味でもヘッセの作品の特質であると言わねばならない。そこには、新たな衣裳をまとった爽やかで真摯な再生が見られる。ヘッセは文と詩と絵の本《Wanderung》(1920)の中の《Mittagsrast》において、《Die Lieder sind voll Wehmut, aber die Wehmut ist nur eine Sommerwolke, dahinter steht Sonne und Vertrauen. Das ist Eichendorff.》<sup>1)</sup>と述べているが、これは実はそのままヘッセ自身の抒情について言えることである。彼とともにその故郷のシュヴァルツヴァルトは、ふたたび瑞々しい魅力をもって呼びかけてくる。美しく整然として清潔そのもので、またいわゆる善意の人にみちていながら、どこか息づまるようなドイツでの日々において、私はその森にまた野に、どんなにか安らぎと慰めとを得てきたことだろう。どれほど憧れをこめて、小雨降る朝も大雪の夕もその中をさまよい歩いたことであろう。ときにそれは、現代の低俗なドイツ人、粗野なドイツ語からの逃避の場でもあった。ドイツ文学なる世界にはじめて足を踏み入れるときから常に意識してきたことだが、現実にドイツで生活してみてもいよいよ痛切に感じたことは、自分にとってドイツが、いや或いはそもそもヨーロッパという存在が、更には「外国」のすべてが、実際はいかに異質であるかということであった。何が「日本的」かというのは、「ドイツ的」とは？と問うのと同じく容易に答える問題ではないが、みずから主観的に日本の文化や精神の真髓と諒解しているものを、実は常にもものを見るときの基準とし尺度としていることにそのとき想い至って、さすがに嘆息したものであった。こうした立場から、すべては、比較のうちにとらえようとする客観的な関心の対象となりえたが、その中であって、孤独にしてまことに心たのしきものは、野や森の自由なさすらいであった。たとえば Freiburg の、私のいた下宿から近い Sternwald など、私はその隅々までよく知り、喜びも寂しさも多くを中に親しく封じこんだものである。

シュヴァルツヴァルトの Nagold 川に沿った谷間の Calw という小さな

町に、私が今も心を深く惹かれるのも、何よりもそこがヘッセの生まれ育ち、そうして終生強い愛着をいだきつづけた土地なればこそである。人はみなそれぞれに故郷を持つ。ヘッセにとってこのカルヴは、生まれ故郷であるとともに、また同時に魂のふるさとでもあった。若いときに早くこの地を去り、以後それは彼の回想の中にのみ生きつづけたのだが、上の意味で、この町こそは、物心がついてから死ぬときまでヘッセをたえず養ってきた母のごとき存在である、と言ってよい。そのような家郷を持ったことは、羨むべき幸せである。こうした点においては、変容はなほだしい大都会に生まれた私のような者には、心のよりどころとなる実際の郷里が欠けている。ただ懐しむべき魂の憩いの地とも言えるようなものを他にあえて求めるならば、私はそれを、青春多感の日を幾年か過ごした北陸の一都市に得たと言いたい。

この古い城下町は、戦火にも焼かれなかった。訪れるたびに、歴史と伝統に心を寄せる者を形容しがたい感慨にひたらせてくれるような都市が、いまの日本にどれほど残っているだろうか。その中で例えば金沢や松江などは、いわゆる裏日本に位置しているために、かえって古い日本の美しさを豊かに残していると思われる。金沢は冬の長い、雪とともに雨も多い町だが、かつての前田百万石のお膝元として栄えた姿と内容とは、いまでも色濃く受けついでいる。犀川・浅野川と二つの大きな川が貫通し歴史の重みに堪えるこの都市は、更にまた鏡花・犀星などゆかしい文人たちのふるさとして、追憶の世界の中で燦し銀のような微光を放っているのである。犀星の「抒情小曲集」に見られる純一な抒情の痛切は私もまた愛するところだが、彼はその中の「小景異情」に、「ふるさとは 遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの」と誦した。私もかの地を訪ねること今はまったく稀であるが、だがそのたまさかの機会におのずから覚える心おどき、これはいささか名状しがたい感情で、しばらくの滞在者に過ぎなかった者の心さえこのように攪んでしまうのは、不思議な力といってよい。

遠きにありて思いそして悲しくうたうふるさとの抒情を、西欧の現代において私はヘッセの中にも見た。ヘッセにとってカルヴの町の小路や家々や、そしてまた人々や出来事は、すべての人間の故郷と人間の運命の原形であり典型なのであった。その作品は、限りもなく多くの筆を費やしてこ

の土地の魅惑的な力を描いているが、少年のころ幾度となく釣り竿を垂らした古い石橋にくらべれば、例えばイタリアのフィレンツェの大寺院広場なども、まことに取るに足りないものとなる。このような郷土への極度に強い愛着と、他方では、ヘッセがいただいていた絶えず未知の遠くへと駆りたてられる漂泊の魂、この二つながら私はカルヴで確認しなければならなくなった。

さすらいの喜びと悲しみを身をもって体験し表現しようとする衝動と、故郷へのあこがれとの間を、彼の生はいつも揺れ動いていた。その青年期といわゆる晩年のはじめとをそれぞれ飾る「ペーター・カーメンチント」ならびに「ナルチスとゴルトムント」、この放浪の二つの物語の間に、「クヌルプ」をはじめとして、どれほどか漂泊・流離の文学も多いことであろう。また旅の心を歌った詩や随想のたぐいを数えあげていったならば、かならずや膨大な量となるに違いない。放浪といい望郷というも、この両者は同じ心の両面にはかならない。先にも記したように、ヘッセは、生まれ故郷を若くして去ってしまったからこそ、反ってそれを想う作品も数多く書いていると言うことができるであろう。

丘の上で見る雲の流れが彼の心を招き寄せる。なごやかな色調に包まれた青いかなたは謎と誘いにみちて、彼の魂をさすらいへと呼ぶ。現在に安住できぬ彼は、つねに憧憬と追憶の中に生きてゆく。過ぎ去ったものを再びあこがれの目標とすることによって、彼は繰り返しそれを新しい気持で味わうことができるのである。こうして回想は育ちつづけ、ポエジーに結晶する。ヘッセの文学の精髓もつまりは、追想をもととした生の象徴的な表現にあると言ってよかろう。それが彼の限界でもある。もちろん特にいわゆる後期の作品においては、もはや甘美な思い出にのみ耽ることなく、はるか遠くをめざす前向きの姿勢が明らかであるけれども、それでもやはり回顧のメロディーは甘くうるわしく、思索・造形の契機として欠くことのできない要素となっている。彼はまた幾度かおさえがたい旅どころに駆られて、長い旅行に出た。それも結局は、母なる大地を理解し体験してそれと一つになることを求める心にほかならなかったが、それは所詮到達しうるものではなく、また仮に一つの目あてには達したとしても、その向こうにまた必ず新たな目標が現われてくる。こうして、つまりは果てしなく

夢みあこがれつづけることになるのである。それゆえ漂泊の道は、結局胸奥なる真実を求める生命の声の中にこそ通じており、この意味からも、真の故郷への願いと一体をなすものといわねばならない。

その前夜チュービンゲンで一泊したのち、私はカルヴに向かった。Horbで乗り換えて、ひなびた汽車にごとに揺られ、ナーゴルト川に沿ってシュヴァルツヴァルトのもみの林を縫ってしばらく北上、しっとりした気分ひたるうち、列車はやがて目的地に着く。このようなローカル線を古びた汽車でひとり旅するのは、快速のクルマで現代風の旅情を覚えるのとまた違った格別の味わいがある。

カルヴの駅を出、川と鉄道に狭くはさまれて **Bahnhofstraße** を北へ進むこと約一軒、やがて古い歴史を持つ橋 **Nikolausbrücke** が姿を現わす。これはヘッセが深い愛をささげたあの石橋である。その橋柱の上に建っているささやかな礼拝堂は **Nikolauskapelle** と称し、西暦一千四百年にさかのぼるゴシック様式の逸品で、ここで、訪問者は古い町の中核に足を踏み入れることになる。私は、石橋のたもとの **》Waldhorn《** にとりあえず宿を決め、ふたたび街に出ていった。このホテルからつい近くの、古い泉のある **Marktplatz** の一角に、ヘッセの生家があった。いまは衣料品を扱う **Daur** という屋号の商店になっていて、ただその店の広場に面した壁の一隅に、あまり目立たぬ小さな記念額が付いているだけである。それには、**》In diesem Hause wurde am 2. Juli 1877 Hermann Hesse geboren.《** とあった。まだ宵の内というのに、すでに人影もまばらである。月が近くに見える山の端に姿をのぞかせ、町はまったく静まりかえっている。古い **Fachwerkhaus** を前にして潺々と音をたてる泉に耳を傾けつつ、ここに私は殆んど小半刻もたたずんでいた。いかにも由緒ありげな建物に囲まれたこの長方形の広場は、なだらかな山を背景にして、夜のしじまの中に神秘的な気配さえあたりに漂わせていた。

この町でたまたま出会った三人の未知のドイツ人たちのことを、いまも私は忘れない。一人は、駅から宿まで自動車で送ってくれた診療所勤務の若い医師、一人は、町の地図を買うためにはいった書店の中年の主人、そしていま一人は、その本屋を出たところで危うくおつかりそうになった初

老の紳士。いわゆる親切な人は、男女を問わず、ドイツの到る処に数多くいる。これが、表面的にのみ見るならば、現在の日本とは比較にならぬぐらいに進んでいる公衆道徳や社会福祉施設などとならんで、われわれにドイツの生活を快適にしてくれる所以の大なるものである。だがまた、その外人に対する親切や愛想よさの蔭に、鼻持ちならぬ野暮な俗物根性がちらついている例も、正直言ってまた甚だ少ないとせざるを得ぬ。立派な教養を一応身につけつつ、ニーチェにはげしい憤りをこめて *Bildungsphilister* とよばれたのが、ほかでもない一般のドイツ人であった。塵一つとどめない見事な街路、衛生的にも非の打ち所の殆んどないような町並、カロリーの多い栄養に富んだ食事、適正な物の値段。これらはヨーロッパ諸国の中にあっても人の目をひくドイツの特長で、殊に経済的な豊かさにおいては現在容易に他の追隨を許さない感があるが、それだけに反ってこの半面には、万事杓子定規で、気持のゆとりのないおしきせがましい態度が露骨にうかがわれる場合も、しばしばなのであった。古来偉大なドイツ精神はすべて、いかにこの唾棄すべき俗物性にはげしい戦いを挑んできたことだろうか。ところでまことに素朴な言いかたであるけれども、ひとときの接触をもった上記のカルヴの人々は、そのような気持のひそかな動きを感じさせなかった数少ない例である。田舎町にドイツのジェントルマンの典型を見いだすことができたようにも思い、この町に寄せる私の回想の日記にとって有難いことであった。

大きな柳の木を向こう岸に眺め、ヘッセが一時はたらいっていたペロットの工場をかなたに眼に入れながら、川に沿って *Bischofstraße* をぶらぶら歩いてみる。この通りは *Bahnhofstraße* の延長で、*Nikolausbrücke* とその北約五百米のところにかかっているもう一つの橋 *Untere Brücke* との間が、そのように名付けられている。家並は川と反対の片側だけで、ゆっくり歩みを移すと、ただ自分の足音のみがこつこつと耳についてくるほどにひっそり閑として、この暗い通りは、「デミアン」に描かれている不気味なものの存在を強く想わせた。こうして夜の街を、更には *Salzgasse*, *Biergasse* と家々の間を歩き抜けていくうちに、ヘッセの作品が、あれこれと思い浮んでまた消えていった。

》*Gerbersau*《の序文によれば<sup>2)</sup>、ヘッセが詩人として、森や川や谷間の草



地やカスターニエンの木蔭やもみの木の香りについて語るとき、いつもカルヴのまわりの森、カルヴのナーゴルト川やカルヴのカスターニエンなどが考えられているのである。そしてまた広場と石橋の上の礼拝堂、Bischofstraße と、これと川をはさんで向かい合った Ledergasse, Untere Brücke のすぐ北、川に沿って屠殺場のある Auf dem Brühl と、Ledergasse の延長で Hirsau のほうへずっと北方に延びた Hirsauer Wiesenweg などは、彼の書物の到る処に再認できるものである。これらの情景のいっさいは、かつて少年の日の彼に原形としてはたらかかけ、そして「祖国」といったふうな何か或る抽象的な概念に対してでなく、まさにこれらの原像にこそ、彼はその生涯を通じて変らぬ愛と感謝とをささげた。それらは彼みずからと彼の世界像とを作りあげるよすがとなり、七十才を越えたそのときなお、あの昔の少年時代より以上に、親しみ深く美しく光り輝いているのであった。ヘッセにとってこれらの言葉は文字どおりの真実であり、私も共感を吝しまない。彼は『Bilderbuch』の中の『Heimat』(1926) という短かい文においても、ヨーロッパからアジアにかけて美しい町はこれまで沢山見てきたが、『Die schönste Stadt von allen, die ich kenne, ist Calw an der Nagold, ein kleines, altes, schwäbisches Schwarzwaldstädtchen.』<sup>3)</sup> と述べている。

こうして私は、詩の世界に心を傾むけ、川と橋を窓から眼前に見渡す簡素な部屋に一夜を過ごしたが、流れる水音が、横になっても耳につきまどって離れなかった。翌日さらに朝露を踏んで歩き廻るべきこの小さな町のたたずまい、またそのあと続いて訪れる予定の Maulbronn のことなどあれこれと想いやりつつ、寝についた。

マウルブロン修道院。

カルヴからは、のろのろと走る鉄道でおよそ二時間、美しい森の丘と深閑としたいくつもの小さい池との間に立っているこの壮大な建造物は、十二世紀に造営されはじめた高雅な様式で、ヨーロッパにおいて一番すぐれた修道院の一つに数えられているという。ここは、直接間接に「車輪の下」や「ナルチスとゴルトムント」などの舞台になっている所で、また「ガラス玉遊戯」にもその雰囲気が濃厚に取り入れられているが、ヘッセのほかには、たとえばメーリケやヘルダーリンなどもこの神学校に学んだこ

とがあって、文学的な感銘をおぼえさせるのにもこと欠かない。実際にはヘッセはこの神学校でわずか半年ほど暮したのみで、しかも脱走というような香しくない別れかたをしているにもかかわらず、やはり後年、この建物全体が彼にとって忘れられない心の故土となった。神学校時代の前後の事情を、自分自身をモデルにして「車輪の下」に形象化したのち、十年ほど経過してから四十才近くになってそこを再び訪ね、そしてなつかしさに耐えられぬ憶いから、小品『Der Brunnen im Maulbronner Kreuzgang』(1913) が綴られたのであった。

内外ともに立派に保存されているこの修道院の建物は、建造以来数百年の歳月を経て、いま周囲の緑の情景と鮮やかに融けあっている。「車輪の下」の描写をしばらく借りてみよう。

Wer das Kloster besuchen will, tritt durch ein malerisches, die hohe Mauer öffnendes Tor auf einen weiten und sehr stillen Platz. Ein Brunnen läuft dort, und es stehen alte ernste Bäume da und zu beiden Seiten alte steinerne und feste Häuser und im Hintergrunde die Stirnseite der Hauptkirche mit einer spätromanischen Vorhalle, Paradies genannt, von einer graziösen, entzückenden Schönheit ohnegleichen. . . .<sup>4)</sup>

広い静かな五月の庭に人の姿もなく、菩提樹、もみの木、それにパラディースの前の清楚な泉も、すべては明かるい中にひっそりとした風情であった。正面の本堂の繊麗な屋根の上には、全体がやや太めの針の先のようなおどけた小さい塔がまたがり、そして同じ本堂の裏手の屋根の上には、本当にまるで鉛筆のようにとんがった細長い塔の空に突き刺しているのが、前面より鮮やかに眺められる。斜めから本堂の建物の全貌を見わたすと、これら二つの塔が垂直平行に走って、この宏壮にしてしかも巧緻な修道院の輪奐の美に或る鋭いアクセントを添えているのである。まことにこの印象はすばらしく、しばらくの間私は立ちつくして、ただ凝視した。マウルブロンには、修道院を除くと、めばしいものは何もない。森と丘と池の他には、斜面のぶどう畑、そしてそれらの間に家がところどころ散らばっているだけだ。俗塵を離れたこの端麗な修道院が、新教派の神学校の生徒た

ちに開放されているのであった。

私は自然に、いくたびとなく訪れた大和路の寺の二・三のありさまにも  
思いを馳せた。

法隆寺の地面は真の白砂、処々に青松を点じて高く爽やか、古松は見透しを少しも妨げず、風は自由に吹き抜けて、そこにははじめじめした何物もない。さらに、中門からは最も奥の講堂の朱の色が透視され、そして飛鳥建築の粋を誇る金堂と五重塔には、左右の、きわめて高次の意味における統一的な均衡が、その背後の講堂と相まって、あらがう余地なく感得されるのである。そしてこれらとは距離をおいた東院の宝玉、夢殿は、玲瓏たるまろやかさにおいて、観る者を夢の世界に遊ばしめるが、これを私は、何よりもマウルブロン修道院の礼拝堂との比較の中においてみた。

塔といえば薬師寺、幾度眺めても魂を奪われる。金堂前の広庭に、他にさえぎるものもなくすくくと明らかに聳え立つこの三重塔の秀麗さ。清々しい壁の白が心にしみる。塔の三重が六重にも伸びて見える音楽的な流動のさまには、胸もふくらむが、しかもまた、塔は静かに鎮まり返っているのである。動を漲らせながら静に覆われてぴたりと収まっているこの建物は、見あげると、その上で遅しい相輪が朗らかに天に沖している。相輪の尖端の遠く肉眼で見る水煙は、まるで小さな波の寄り集ったような中にすいすいと川魚が飛ぶかとも映じ、それをかすめて雲がゆっくりと流れてゆく。

松林の一劃を占める唐招提寺は、松の梢ごしに金堂の臺が落ち着いたあざやかさを見せ、鷗尾がほのかに輝いている。門をくぐれば、白い境内の路、そしてその両側は赤松の疎林。突きあたりには、金堂の細長い建物が、屋根のかたちも気高く、幽静そのものの姿を呈して立っている。軒の出は大きくて、影を深々と落とし、それが、エンタシスをわずかに見せる吹き放しの円柱の列とともに、慈悲の大らかさを示している。

これら大和の古寺とマウルブロン修道院、両者の私に与える感動は、本質的に相異なるところがないと思う。しいて言うならば、一つは、わが魂の出所なる純正のふるさとへの深き思慕であり、他は、わが心の望み求める未知なる高きものへの強きあこがれに繋がるものともなし得ようか。いずれにせよ、これらの建物を前に広やかな空間に一人立って、しばしの

間うっとりとして内なる世界に沈潜しうるのは、大きな喜びであった。

さてこの修道院の内部に入れば、とりわけ、ほとんど損傷のない廻廊は、それだけでも実に見事な建物で心をとらえるが、その中には殊に、前に少し記した噴泉を持ったすばらしい礼拝堂があって、夢殿を法隆寺の真珠にたとえるなら、これはまさしく廻廊を飾る宝石とも名付けるべきであろう。廻廊を進んでこの礼拝堂に近づくにつれ、次第にさやかに耳を追ってくる泉水の妙なる響き、明かるい御堂に足を踏み入れたときの、思わずあっと声をあげるような陶然たる驚き、そして間近に聞くこの水の、永遠につきずテンポの早い潺湲たる響韻の神秘さは、これを一体何にたとえればよいのであろうか。この旋律は、私の耳の中にいつまでも消えず残るものにちがいない。ヘッセは限りないあこがれをこめて、「マウルブロン」の廻廊の噴泉」の中で次のように歌った。そこには、祈りにも似た詩人の切なる感動がこめられている。

Nun aber, da ich gegen die Ecke schritt, klang mir eine selig seltsame Musik entgegen, leichte traumhafte Geistertöne mehrstimmig in versunkener Monotonie, nicht fern noch nah, wundersam und selbstverständlich, als klänge die Harmonie des Bauwerks ernst und innig in sich selbst wieder. . . .<sup>5)</sup>

このように霊妙な響きは、滅多に接しうるものではない。

Verwirrt und beschämt trat ich dem Wunder näher, stand am Eingang der Brunnenkapelle und sah im klaren Schatten des gewölbten Raumes die drei Brunnenschalen übereinander schweben und das singende Wasser fiel in acht feinen Strahlen von der ersten in die zweite Schale, und in acht feinen klingenden Strahlen von der zweiten in die riesige dritte, und das Gewölbe spielte in ewig holdem Spiel mit den lebendigen Tönen, heut wie gestern, heut wie damals, und stand herrlich in sich begnügt und vollkommen als Bild von der Zeitlosigkeit des Schönen.

ヘッセはこの礼拝堂に、時を超越した美の似姿を見たのであった。これ

までに多くの気高い御堂が彼を迎えた。多くの美しい歌が彼を元気づけまた慰めた。多くの泉が旅人である彼に清らかな音をおくってくれた。だがこの噴泉はそれら以上だ。それらとは比較を絶したものである。ヘッセは言う――

... er (dieser Brunnen) singt das Lied meiner Jugend, er hat meine Liebe gehabt und meine Träume beherrscht in einer Zeit, da jede Liebe noch tief und glühend, da jeder Traum noch ein Sternhimmel voll Zukunft war. Was ich vom Leben hoffte, was ich zu sein und zu schaffen und zu dulden dachte, was von Heldentum und Ruhm und heiliger Künstlerschaft meine ersten Lebensträume erfüllte und bis zum Schmerz mit Reichtum überschwoll, das alles hat dieser Brunnen mir gesungen. . . .

マウルブロンは、カルヴとともにヘッセにとってとこしえに尽きぬ清泉となった。

ひるがえってここで私自身の少年の頃をふりかえってみるとき、父の郷里大和上市なる吉野川での魚釣りや水遊び、小学校で演じた源実朝の劇の日々など、いずれも忘れがたい思い出であるが、柔軟な心の形成にたいして特に大きな影響をおよぼした或る生活体験をここにあげておかねばならない。それは先にも少し触れた軍の学校でのおきふしで、わずか五ヶ月にもみたぬ、いまから考えれば束の間の生活であったけれども、年月の経過とともに、過去を憶う心の世界の中で重みを加えてゆくばかりである。そこは海に近い神戸の或る丘の上であったが、屋上からかなたに見下した明石海峡の、絵具を塗ったように動かぬ青色の鮮やかさと、その中にくっきりと浮かんだ淡路島の耀明な土の色、それが臉に焼きついている。明石空襲の夜の空の赤さ、復員のとき校門の外に整列して見送ってくれた女子職員たちの瞳も心に残るが、何よりも私はここで、幾人かの先輩にすぐれた武人の典型を見た。日本古来の武士道精神に「スマートネス」を加えた「シーマンシップ」。それは私自身の当時の理想であり、またその故にこそ、回顧が常にさわやかなのである。このかつての訓育の場には、十数年

を経て一度だけ立ち寄ったことがある。緑深い丘の姿も、戦後の「開発」によって勿論昔の俤は消えうせていたが、学校の敷地や建物はあの頃とほとんど変わらず、八月の酷暑の中にそぞろ昔をかみしめた。格別際立ったところもないその土地を以後ふたび訪ねる機会もないが、ここで育てあげられた精神の雰囲気は、日月の経過のうちに詩の坩堝の中で純化の一途をたどり、いわば家郷となっているのである。そして心の中では、いくたびかそこへ還ってゆく。

人間にとって、真のふるさとは無視することのできぬものだ。ヘッセのような作家にあっては、表現の末にいたるまで、そのふるさとの空気を呼吸している。所詮文学は路傍の花だ、と私も思う。これに眼をとめようがとめまいが、いわゆる実生活と大したかわりのあることではない。トーマス・マンの「トーニオ・クレーガー」をかりれば、文学を必要とする人間は、「詩を人生への穏やかな復讐とする人、つまり、いつもきまって悩んでいる人、あこがれている人」であり、また文学と無縁な人種は、「碧い眼をした、精神を必要としない人たち」である。言わずもがなのことだけれども、もちろん文学は、日本語では学という字がつくので紛らわしいが、学問とはもともと異なった領域のものである。文学の本質をなしてわれわれを魅了するのは、そのこまやかさ、真実の美しさ、ぬくみというようなことであって、偉大な思想や知識などといっても、それら自体のみでは、本来直接には文学と何の関係もあり得ない。文学作品は、作家のゆたかな想像力を母胎として生みだされるものだが、その批評とは、ゲーテの言葉にまつまでもなく、何がいかに書かれているかを、同じく想像力によっておぎないながら吟味する仕事で、批評する者が作家とその製作の体験を共にしようとする態度こそ、真の創造的批評につながる道といわねばならない。珠玉の玲瓏を素材に、いわゆる知的な学問的な操作を加え無味乾燥の悪文を草して、これを「業績」として徒らに数の多きをめざす。そこに何ほどの意味があろうか。これは自戒の言葉である。Wissenschaft という語の荘重な響きも、これをポエジーの世界に打ちたてようとするとき、空しいものと化する危険をいかに多く孕んでいることか。文学の生半可な「学問」ほど興味索漠たるものを、私は他に多く知らない。文学の創造にも研究にも数々の苦しみがとれないがちなのは当然すぎることだが、それとは

別にまた、文学とまで無理に辛い思いをして付き合おうとするのは、ナンセンスであるとしか考えられない。文学を研究するのは、至難の業である。これは、この拙文で竟にふるさと云々に終始して逃げたみずからのディレクティズムを省みて、切なく洩れた嘆息の言葉と取られてよい。

(1966月 8 月)

#### 註

- 1) Hermann Hesse: Gesammelte Dichtungen, 1957, Suhrkamp Verlag, 3. Band, S. 414.
- 2) Hermann Hesse: Gerbersau, 1949, Rainer Wunderlich Verlag Hermann Leins, 1. Band, S. 8.
- 3) ibid., S. 11.
- 4) Hermann Hesse: Gesammelte Dichtungen, 1. Band, S. 425.
- 5) Hermann Hesse: Gerbersau, S. 374.

以下二つの引用も同。

## Calw, Maulbronn

—Auf der Suche nach H. Hesses Heimat—

Hiroyuki Fujii

Es ging Hesse wider die Natur, mit der Gegenwart zufrieden zu sein und ein ruhiges Leben zu führen, und er verbrachte seine Zeit oft hingegeben an Erinnerungen und Sehnsüchte. Indem er das Vergangene als ein wieder zu erreichendes Ziel aufstellte und sich danach sehnte, entfaltete er die Erinnerungen immer mehr und kristallisierte er sie zur Poesie. Das Wesentlichste von Hesses Dichtung besteht, so könnte man sagen, in einer Symbolisierung des Lebens durch die Erinnerungskraft. In Hesses Werk findet man einen neuen Glanz der deutschen Romantik, und seinem Hang zum Romantischen liegt nebst der Reiselust in das blaue Unbekannte vorwiegend die Erinnerung an das Heimatland.

Hesse wurde am 2. Juli 1877 in Calw geboren. Er sagt in dem Abschnitt „Heimat“ (1926) des „Bilderbuchs“ dichterisch und mit Recht: „Die schönste Stadt von allen, die ich kenne, ist Calw an der Nagold, ein kleines, altes, schwäbisches Schwarzwaldstädtchen.“ Es prägte den Geist und die Seele des Dichters für immer. Der Wald um Calw, die Calwer Nagold, die Tannenwälder und die Kastanien von Calw, und auch der Marktplatz, die Brücke und die Kapelle, die Bischofsstraße und die Ledergasse, der Brühl und der Hirsauer Wiesenweg waren in dem kleinen Hesse zu Urbildern geworden. Eben diesen Bildern, so schreibt er im Geleitwort zu „Gerbersau“ (1948), sei er zeitlebens treu und dankbar geblieben, sie hätten ihn und sein Weltbild formen helfen, und sie leuchteten ihm heute noch inniger und schöner als je in der Jugendzeit.

Etwa 40 km nördlich von Calw liegt in Maulbronn ein Zisterzienserkloster, das als die schönste und am besten erhaltene Klosteranlage Deutschlands



gilt. Dieses bedeutete auch für Hesse sehr viel, obgleich er, der im dortigen Seminar Schüler war, es nach einem halbjährigen Aufenthalt unglücklich und mit Herzensnöten verlassen mußte. Später besuchte der Dichter den Ort wieder einmal, und dann schrieb er in liebstem Gedenken „Der Brunnen im Maulbronner Kreuzgang“ (1913). Die selige Harmonie der Kapelle im Kreuzgang, insbesondere „leichte traumhafte Geistertöne“ von dessen Brunnen besang Hesse in diesem Essay mit tiefer Rührung. Er sah darin ein „Bild von der Zeitlosigkeit des Schönen“. Maulbronn bildete so eine unvergängliche Stütze für seine Seele.

Um ein literarisches Werk zu bewerten, soll man die so erlebte Heimat des Verfassers nicht unbeachtet lassen. Bei einem Dichter wie Hesse atmet man bis zum letzten Klang der einzelnen Ausdrücke tief die Luft der Heimat. Eine Dichtung entsteht mittels starker Einbildungskraft des Autors, und zur kongenialen Kritik führt nur die Haltung eines Kritikers, die die Erlebnisse des dichterischen Schaffens nachzufühlen imstande ist. Das Miterleben der Hesseschen Heimat ist gerade in diesem Sinne nötig.